アジア・アフリカ地域研究 第16-2号　2017年3月
Asian and African Area Studies, 16 (2): 198-226, 2017

フィールドワーク便り

双子を希望する女性たち

──『ガールズトーク』にみるウガンダ女性の結婚・出産観──

中　澤　芽　衣*

「あなたはいつ結婚するの？」

村を訪れるたびに，私はこの単純ではあるが，非常に答えづらい質問に困惑してしまう．

2013年9月から，私は首都カンパラから南西に約200 km離れた農村に住み込み，フィールドワークを続けている．調査村には，アンコーレやガンダ，コンゴ，チガ，トロ，フンビラ，ルワンダといった民族の人びとがともに暮らしている．2015年9月現在，全66世帯のうち44世帯では夫妻がともに暮らしていた．5世帯が未婚もしくは離婚経験のある男性世帯で，残りの17世帯が配偶者と離婚もしくは死別を経験した女性の世帯であった．女性たちは単身もしくは子どもや孫たちとともに暮らしていた．未婚の女性がひとりで生活することは珍しく，村内ではみかけなかった．ひとり暮らしの未婚女性がすくない理由のひとつとして，女性は結婚するまで両親のもとで暮らすべきだという認識があげられる．アンコーレやガンダの社会では，男性は社会や家庭内において強い権威をもち，家庭内でのお金の使い道などを執り仕切っている．2000年以降，都市部では高学歴で男性と同等の経済力をもつ女性の社会進出がめざましいとされている一方で，農村社会は依然として男性優位の社会（male-dominated society）であり，未婚の女性がひとりで暮らすことに否定的な意見をもつ人が多い．

かつて，私はお世話になっている家のお父さんに自分の家を敷地内に建てたいとお願いしたことがある．「未婚の女性が家を建てることには賛成できない．いつか，私が家を建て替えるときにあなた専用の部屋をもうけてあげる」とお父さんは説明し，私のお願いは却下された．ここまで読むと，農村の女性たちが窮屈な日常生活を過ごしているイメージを与えているのかもしれないが，決してそうではない．女性たちは毎日朝早くから農作業に従事し，昼食や夕食の準備，子どもの世話，家の掃除と常に忙しく働いているが，お楽しみの時間がある．それは，日本でいう『ガールズトーク』である．

村内では，女性たちが頼母子講を実施している．頼母子講のことをセービング・マ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ネー（saving money）と呼び，毎週日曜日の夕方には，女性たちはお金をたずさえて，村内の小学校へでかける．お世話になっている家のお母さんがこの頼母子講に参加しているため，私も日曜日の夕方にはお母さんと一緒にでかけるのが日課となっていた．お母さんは昼食を済ませると，早々と水浴びをし，服を着替えたのち，足早に小学校の校庭にむかう．小学校に着くと，すでに 5 人ほどの女性たちがお喋りしながら待っている．集合時間はとくに決められていないため，ある程度の人数がそろうと，記帳役の女性が帳簿を開き，集金をはじめる．字を書ける人が帳簿に記帳する役を担っているため，その女性が来ないと，いつまでたっても集金をはじめられない．彼女たちはてきぱきとお金を集め，その日に集めた金額をボールペンで帳簿に記入する．

集金が終わると，この女性たちだけの空間では，ガールズトークがはじまる．私が同席したある日の会話をみてみよう．最初は「調子はどう？」，「家に備蓄しているインゲンマメが底をつく」，「もうすぐ学校がはじまるけど，教育費を支払えない」など，たわいもない世間話をしていた．夫の視線を気にしないですむため，会話はすこしずつヒートアップしていき，「夫は朝からお酒を飲んでばっかりで，働かない」や「夫は町にでかけるたびにお金を食べて帰る」と夫に対する愚痴をこぼしはじめた．「お金を食べる（*kulya sente*）」は，ガンダ語で「無駄使いをすること」を意味する．夫に対する愚痴が出つくすと，やりとりは最高潮を迎え，彼女たちはウガンダと日本の恋愛について話しはじめた．私は発話せずに女性たちの輪のなかでおとなしく座っていただけなのに，突然「日本のカップルはどこにでかけるのか」，「デートのときの食事代はどちらが支払うのか」，「どのタイミングで彼氏，彼女の関係になるのか」といった日本の恋愛事情に関する質問攻めにあった．しまいには「高校生や大学生のときに彼氏がいても，妊娠する女性が少ないのはなぜか」という質問をうけ，私は答えに詰まってしまった．ウガンダと日本の恋愛の違いについて話しあっていたのに，気がつけば私の結婚の話題に移っていた．「メイはいつになったら結婚するのか？」，「知り合いにオススメの男性がいるから紹介するよ」と，矢継ぎ早に質問される．「メイ，ここにくる暇があるのなら，まず日本で結婚相手を探しなさい」という冗談かどうかわからないことまでいう女性がでてきた．どうやら村の女性たちは，私がいまだに結婚する気配もなく，毎年村に足を運んでいることを気にかけていたようだ．

なぜ，しつこく「いつ結婚するのか」，「はやく結婚しなさい」といわれるのか不思議に思っていたのだが，ウガンダと日本の平均初婚年齢を比較すると謎が解けた．厚生労働省のホームページによると，日本の 2014 年における平均初婚年齢は，男性が 31.1 才，女性が 29.4 才である［厚生労働省 2015］．京都にいると，まだ焦る必要はないと私は思ってしまうのだが，ウガンダの平均初婚年齢をみてみるとそうはいかない．ウガンダ統計局の報告によると，2011 年の平均初婚年齢は男性が 22.3 才，女性が 18.1 才である［UBOS

写真 1　村で開かれた結婚式
この日，妻となった女性の年齢は 18 才であった．（2016 年 9 月撮影）

2013]．ウガンダでは，私はすでに結婚をして子どもがいてもおかしくない年齢であり，村の女性たちが焦って私に結婚をすすめる理由を理解できる（写真 1）．

結婚話の最後には，「将来，何人の子どもを出産する予定なのか」と尋ねられた．結婚する予定のめどがたっていない私にとって，この質問に答えることは難しいが，私は結婚後の自分を想像し，出産状況や子育て，養育費などを考慮して質問に答えた．「きっと出産は 2 回が限界」と伝えると，女性たちは「子ども 2 人は少ない」とすかさず反論する．中央情報局の『The World Factbook』において，ウガンダの女性が一生涯に産む子どもの数，人口特殊出生数は 2016 年では 5.8 人で，日本の人口特殊出生数は 1.4 人である［CIA 2016］．頼母子講に参加していた女性たちは，みな既婚者である．彼女たちの結婚年齢と出産回数をみてみると，「日本で結婚相手を探しなさい」と私にいった R さんは 15 才で結婚し，7 人の子どもを出産している．記帳役の F さんは 19 才で結婚し，4 度の出産を経験した．村で 1 番出産回数の多い J さんは 15 才で結婚し，9 人の子どもを出産した．女性たちは 10 代後半に結婚し，20 代前半までに初産を経験している．ウガンダの人口特殊出生数や村に住む女性たちの出産経験を考えると，「出産は 2 回が限界」という私の発言に女性たちが物足りなさを感じたのも当然である．

そして，「出産を何回もする体力がないのならば，双子を 2 回産めば子どもは 4 人になる」と女性たちは真剣な顔つきで双子を 2 回出産する案を提示してくる．日本では双子に遭遇する機会はあまり多くはないが，ウガンダでは，日本に比べると双子に遭遇する機会は多い印象をもつ．ガンダ地域では双子には特別な力が秘められていると信じられており，双子を出産したときには，その子どもたちに特定の名前を与える慣習がある．長男はワスワ（Wasswa），次男はカトー（Kato），長女はバビリエ（Babirye），そして次女はナカトー（Nakato）と決まっている．双子を出産した親には大きな名誉が与えられ，その父親はサロンゴ（Salongo），母親はナロンゴ（Nalongo）と，両親にも新しい名前が授けられる（写真 2）．独立時からウガンダを調査している吉田［2012］は，首都カンパラで双子を連れて歩いていると「こんにちは，サロンゴ」，「バナナをあげるよ，ナロンゴ」と知らない人から声をかけられたと記している．

別の日，「この村のことを勉強してくれてありがとう，お疲れさま」と，調査に協力してくれた女性 V さんが畑で収穫したバナナ 1 房を私にくれた．よくみると，2 本のバナナが根元から先まで双子のようにくっつい

写真 2　双子を 3 回出産した女性ナロンゴ（Nalongo）
4 回の出産を経験した彼女は，私と同じ年であった．（2016 年 9 月撮影）

写真 3　日が暮れはじめ，それぞれの帰路につく女性たち
ガールズトークを終えた彼女たちの表情はどことなくスッキリしていた．（2014 年 7 月撮影）

ていた．調査助手は笑みを浮かべながら，私にそのバナナを食べるように促してきた．将来，双子を産めるようにというＶさんと調査助手の願いが込められていた．『双子を出産できるように』という願いが込められたバナナを拒否することはできず，将来村の人たちから双子の母ナロンゴと呼ばれることにすこし憧れを抱きながら，私はそのバナナを美味しくいただいた．早くに結婚し，双子に限らず多くの子どもをもうけることを望む彼女たちだからこそ，私が村に帰るたびに口を酸っぱくして結婚や出産について聞いてきたのであった．女性だけの会話に参加することで，すこしずつ村の女性たちの結婚と出産への想いについてわかるようになってきた．

冒頭に述べたように，女性たちは頼母子講のために村内の小学校に集まっていたのだが，集金にかかった時間は 30 分で，その後，ガールズトークは 1 時間 30 分も続いた．女性が喋りだしたら止まらないのは，日本だけでなくウガンダでも同じであった．まるで恋する少女のようにはしゃぎながらガールズトークに花を咲かせていた彼女たちは，妻であり，また母でもある．彼女たちは子どもたちの水浴びや夕食の準備といったみずからの責務を怠ると，夫から叱責されることもある．日が暮れはじめると，誰かが会話を制止することもなく，女性たちはそれぞれの家路につく（写真 3）．こうして，週 1 回の女性たちのお楽しみは幕を閉じた．

引　用　文　献

Central Intelligence Agency (CIA). 2016.〈https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/fields/2127.html〉（2016 年 11 月 21 日）

厚生労働省．2015.〈http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai14/dl/gaikyou26.pdf〉（2016 年 10 月 25 日）

UBOS (Uganda Bureau of Statistics). 2013.〈http://www.ubos.org/onlinefiles/uploads/ubos/gender/Uganda%20Facts%20and%20Figures%20on%20Gender%202013.pd〉（2016 年 10 月 25 日）

吉田昌夫．2012.「ふたごとその名前，儀式」吉田昌夫・白石壮一郎編『ウガンダを知るための 53 章』明石書店，186-187.